

## イギリス出張報告（2007年9月6日～13日）

北海道大学公共政策大学院教授 山口二郎

2007年9月6日から13日まで、私と小川有美氏は、イギリスに行き、ブレア政権退陣後のイギリス政治に関する調査と、イギリスの政治学者やシンクタンクとの交流を行ってきた。現地での活動の記録は次の通りである。

### 9月7日

ウォーリック大学において、コリン・クラウチ氏と会見。

クラウチ教授は、私自身が監訳した『ポスト・デモクラシー』（原著は2003年）の著者であり、グローバル資本主義が猛威を振るう時代における民主政治の可能性について、最も根本的に思索している学者である。

まず、『ポスト・デモクラシー』以後の政治の展開をどう見るか尋ねて



みた。クラウチ教授は、不確実性と公共領域の接合という論理を展開した。不確実性（uncertainty）とリスクを区別し、後者は計算可能で、民間の損害保険のように市場における取引が可能だが、前者は計算不可能で、市場における取引や商品化も出来ないと規定する。この不確実性は個人で引き受けることはできないのであり、集団的に処理する公共領域（public space）が必要だということになる。イギリスでも、この公共領域に関する議論が活発になっていると指摘された。

私自身はこの数年の著作の中で、リスクの社会化—個人化という対立軸を用いて日本政治を説明しているが、クラウチ教授の用語法に従えば、リスクではなく、不確実性ということになる。商品化できず、市場での取引になじまないという性格を明確にするためには、そのほうがよいと思えた。

7月の参議院選挙に示された日本政治の変化を説明すると、クラウチ教授も大きな興味を示した。イギリスでも日本でも、ポスト・デモクラシー状況に対する反省はかなり広がっており、教授のような危機感も共有されるようになった。イギリスでも、ブレアの退陣、ゴードン・ブラウンの首相就任とともに、微妙な政策変化が始まったとされる。

ここで、ポスト・デモクラシー以後の展望を考える、ポスト—ポスト・デモクラシー論が必要だと語ったことが、印象的であった。人間の尊厳、環境など市場では買うことのできない価値を守るために、政治的にも反撃するという気運が高まりつつあることを感じた。クラウチ教授には、来年4月に来日していただき、ポスト—ポスト・デモクラシーについて語っていただくことにした。



## 9月10日

シェフィールドにてアンドリュー・ギャンブル教授と会見

ギャンブル教授は、イギリス政治研究の第一人者である。彼にも、ポスト・ブレアのイギリス政治について尋ねた。彼は、アメリカというファクターの大きさを強調した。ブレアがつまづいたのも、特に戦争という政策について、アメリカに近すぎたからであった。ヨーロッパレベルで平和と平等というモデルについて

幅広い合意を追求しようとしても、アメリカという唯一の超大国の動向には常に影響を受ける。ブッシュの8年間は、イギリスやヨーロッパのリーダーにとっても困難な時代であった。イギリスやヨーロッパの自立性を保ちつつ、アメリカのグローバルなリーダーシップに建設的に協力するというスタンスを取るというきわめて難しい両立を、ブラウン政権は迫られるであろうというのが、ギャンブル教授の見通しであった。

国内政策について、労働党内にはブラウンの登場によって、社会民主主義路線への回帰を期待する声もあるが、実際には難しいであろう。ブラウンは、イギリスのスーパーリッチに対する非難も避けているし、シティに友好的というイメージを維持することに気を使っている。同時に、ブラウンは質素な生活をする禁欲的な人物であり、社会正義や平等の実現には意欲を持っている。着実に政策を実行するという政治手法をこれからも続けるであろう。メディアも、「ゴードンは実行の男」というような肯定的なイメージを持っている。

また、ブラウンは、ブレア時代に労働党の中央集権化があまりにも進んだので、その点を是正し、党の下からの参加、インプットを進めるための改革を行う意欲を持っている。

ギャンブル教授は、控えめながらブラウン政権への期待を語っていた。

## 9月11日

### 1 Policy Network を訪問。ロジャー・リドル氏と会談。

リドル氏は、1996年、つまりブレア政権誕生直前に、ピーター・マンデルソンとともに、*The Blair Revolution* という本を書いた、ブレアの側近、ブレーンであった。私が1997年にオックスフォードに留学したとき、現地で最初に手にした本が、このブレア・レヴォリューションで、中道左派政党の立ち上げという同じ実践的関心を持っていた私にとっては、本当に衝撃的な本であった。その意味で、リドル氏との会見は楽しみであった。

彼は、日本にも関心を持っており、平等社会という日本のイメージが最近どうなったのかと逆に質問された。私は、小泉時代の新自由主義改革の展開について説明し、日本でもまさに第三の道が今こそ必要だという話をした。すると、彼は、資本主義のグローバルな展開に対抗して、社会民主主義もグローバルな展開が必要であり、日本の研究者やシンクタンクとも連携していきたいという希望を述べた。その点では、私たちの関心とも結合する。来年の洞爺湖サミットの時期に合わせ、社会的価値を追求する国際的な会議を開くよ

う努力することになった。

ポリシー・ネットワークは、ニューレーバーを比較的好意的に評価し、現実の政治の展開の中で、新しい進歩的なコンセンサスを一歩でも二歩でも前進させるというアプローチを取ったシンクタンクである。最近、出版活動を進め、たとえば、**Public Matters**（公共領域の重要性）という論文集を出し、公共サービスの重要性を説く一方、経営手法については市場の要素を取り入れつつ改革を進める必要があるというスタンスを示している。その点で、同じく公共領域の重要性を主張するにしても、原理的な批判を打ち出すクラウチ教授などとは異なったアプローチを取っている。

しかし、外から見ると、理論的、理念的な批判と、内側からのプラグマティックな政策展開という二つの要素は、まさに社会民主主義の現代的展開にとって、車の両輪であり、両者は役割分担をしているように思えて、じつにうらやましかった。

この後、フェビアン協会を訪問し、ティム・ゴア氏と会談した。ゴア氏も、リドル氏と同様の関心を持ち、労働党政権に現実的な政策提言を行っている。

## 2 コンパスにてニール・ローソン氏と会見

コンパスとは、ブレア時代の労働党が糸の切れた凧のように浮遊し、ビジネスに近寄りすぎたり、戦争に加担したりすることを憂慮した、知識人、市民運動家、労働組合、シンクタンク研究者などが集まって結成した、運動体である。クラウチ教授も設立委員の一人である。ローソン氏は、コンパスの実質的なリーダーである。ブラウン政権の発足を機に、コンパスは労働党の国会議員を組織し、市民との接触の強化、したから、外部からの様々なインプットを進めている。コンパスは、市民参加と社会民主主義の再生という理論的なテーマに取り組む点で、我々のプロジェクトにとっての一つのモデルである。同時に、実際に正当に影響力を行使するという実践的な方法論についても、きわめて興味深い実験を行っている。



短い滞在であったが、多くの人々に話を聞くことができ、さらに今後の交流についても道筋をつけることができ、有益な旅行であった。イギリスの知識人や市民活動家が、現実政治と向き合いながら、理念によって現実を少しでも動かそうとする姿に、大きな感銘を受けた。

情報通信技術が進歩した今、世界中どこにいても日本からはリアルタイムで情報が伝わってくる。安倍首相の突然の退陣表明の知らせを聞いたのは、未明のロンドンのホテルのベッドの上であった。小泉元首相とブレア前首相を重ね合わせるならば、その後継者たる安倍とブラウンには天地の差がある。その点も、今回の調査の中で考えていた最中の出来

事であった。最後に、現地での経験を基にして書いた、『論座』への寄稿の一部を引用しておきたい。

「今回イギリスに行った目的の一つは、トニー・ブレア以後のイギリス政治について調査することであった。現地の政治学者とポスト・ブレアのイギリス政治について議論する中で、ゴードン・ブラウンと安倍晋三の対比が面白いと考えていた矢先の退陣表明であった。両者はともに長期政権を持続したカリスマ的なリーダーの後継者という点で同じような立場に置かれていた。彼らはともに、政治の人格化の後始末をどうつけるかという問題に直面していたのである。

政治の人格化とは、次のような現象である。従来の政党や組織を政治行動の単位とする代表民主政に対する不満が高まると、リーダーは古い政党組織を否定し、国民に直接語りかけて、国民の支持を獲得しようとする。組織に束ねられず、しがらみを持たない普通の市民と直接結びつくことによって、支持を得ようとするのである。また、代表者による交渉ではなく、民意を政策決定過程に直接伝えることによって、迅速でダイナミックな政策転換を図るようになる。これらの特徴はトニー・ブレアと小泉純一郎の両者に当てはまる。

このような手法をどう継承、あるいは否定するかが後継者に問われているのだが、この点についてはブラウンと安倍は対照的である。

ブラウンは、自分が華のない政治家であることをよく自覚している。したがって、メディアに露出したり、人目を引くようなパフォーマンスをしたりという手法をあえて避け、堅実さを売り物にしている。イラクからの段階的な撤退、国内における平等の重視など、前政権とは異なる政策を着実に実行しようとしている。英語では、政治家の演出、振り付けのことをスピンという。今回、労働党のスピンを担当していたブレンにもインタビューできたが、彼は、ブラウン政権は政治を金びかの活動ではなく、しらふ (sober) であるものに変えたと表現した。ブレア政権の末期には、労働党は保守党に支持率で大きく後れを取っていた。しかし、ブラウンのそうした姿勢が世論調査で予想外の支持率を獲得する原因となっている。見た目もよく、弁も立つが、しばしば傲慢になり、戦争という間違っただ道に進んだブレアよりも、まじめでひたむきに政策に取り組むブラウンに、イギリス国民は今のところ好感を持っている。」